

資質・能力の育成を企図した教科の学習評価に関する研究

－保健体育科に焦点を当てて－

頓所 弘之 (静岡大学教職大学院)

1. 目的

資質・能力の育成を目的とした保健体育科の学習評価の在り方を追究し、具体的な検討を行うことを通して、何を評価する必要があるのかを明らかにするとともに、実践における課題についての示唆を得ることを目的とした。

2. 方法

1) 保健体育科の学習評価の実態調査

S県内S市内中学校5校の保健体育科教員を対象に調査した。

- ①質問紙調査の記述内容を分析し、教師の学習評価の視点を把握した。
- ②インタビュー調査の発言を分析し、教師が具体的に何を評価しようとしているのかを把握した。

2) 資質・能力を育成する視点からの学習評価の問い直し

すべての教科を貫く視点から資質・能力を解釈し、学習評価の在り方の具体を検討した。

3) 概念の理解を目的とした授業構想

見方・考え方を鍛える視点から、保健体育科授業の学習内容と学習過程、学習評価の具体を検討した。

4) 授業実践による検証

S市立T中学校第2学年3学級を対象に、「運動の概念や法則」の理解を目的とした授業を構想し実践した。実践授業における生徒の学習カードの記述を分析し、「運動に関する概念や法則」の理解の様相を把握し、学習評価について考察した。

3. 結果ならびに考察

1) 保健体育科の学習評価の実態調査

運動を知っていることとできること、運動ができることとわかること、運動への取り組みの様子を評価していることから、運動種目が主体の評価になっていることが把握された。

すべての教科に共通する資質・能力の育成という目的を的確に捉え、そこから保健体育科の評価の在り方を捉える必要があると考えられた。

2) 資質・能力を育成する視点からの学習評価の問い直し

資質・能力の育成とは、見方・考え方を鍛えること

と捉えられた。それは、生徒が保有している知識を、教科の特質に沿った鍵概念の理解を深めることで、知識同士が関連し合ったり、曖昧だった認識が明確になったりして、生徒の知識の構造が組み替えられていく様相と考えられた。

これらの目的を捉えた評価を行うことから、知識・技能においては、概念的な理解の深まりによる構造化された知識、探究の方法を評価する。思考・判断・表現においては、問いに対する仮説を立て、課題解決の方法を考えられているか、知識を活用して、考えたことを表現しているかを評価する。主体的に学習に取り組む態度は、それら二つの観点を複合的に活用した学習の中で、自立的な課題設定や持続的な探究などの学習に取り組む態度を評価すると考えられた。

3) 概念の理解を目的とした授業構想

見方・考え方を鍛えるためには、各種目に内在する運動の仕組みに着目し、運動種目に内在する運動の概念や法則を学ぶことが中核に据えられなければならない。これまでの上手くできるための行い方やコツなどの追究から、「なぜ上手くできるのだろう」「そこにはどのような原理があるのか」と追究の方向の転換が求められる。そして、運動の概念や法則に対する問いについて自分の考えを構築し、それを基として、検証、分析、仲間との対話を通しての考察を経て、自分の考えを再構築する学習の積み重ねが必要と考えられた。

4) 授業実践による検証

運動の概念や法則の内実に迫っていく授業を実践し、生徒の学習カードの内容を分析した。生徒の知識の様相は表面的な動きを捉えたもので、個別的要素的な知識の増加はしているものの、その視点は運動の内実にある概念の理解までは至っていないと考えられた。概念の理解を深めていくためには、個別的要素的な知識の意味を探究することで、概念を形成していくような単元を実践していかなければならない。その探究による知識の変容を丁寧にみとり評価していくことの必要性が示唆された。

4. 結論

単元毎に個別の評価を行うのではなく、単元の連続性による系統の視点を構造化されていく知識に置いて評価を行うことが必要と捉えられた。